

## 謝辞

本展覧会開催にあたり下記の関係機関、個人の方々に多大なご協力を賜りました。  
ここに記し、感謝の意を表します。(順不同 敬称略)

カルティエ	東京工芸大学写真センター	有限会社トップアート鎌倉	多木浩二	髙谷典子
エプソン販売株式会社	島根県立美術館	株式会社カシマ	清水権	下田理恵
タカ・イシイギャラリー	日本テレビ放送網株式会社	株式会社写真弘社	平野啓一郎	藤澤卓也
	株式会社講談社		大竹伸朗	岩間玄
	有限会社月曜社		金平茂紀	北島敬三
	株式会社淡文社		清ようこ	渡辺聡
	トラフィック株式会社		甲斐義明	
			林道郎	
			鈴木一誌	
			Karl Hyde	

# 森山大道

## I. レトロスペクティヴ 1965-2005

## II. ハワイ

# 展



ハワイにて

ぼくが初めて写真を撮したのは、中学生のころ町の模型店で買った(スタート)という名の玩具カメラだった。ぼくはそれで、家の犬を写し庭の花を写し、空地の水道タンクを写し姉弟を写して、それっきり飽きて写真のことなどすっかり忘れてしまっていた。

しかるに二十一歳のとき、まだぼくの夢は他に多くあったはずだが、なぜか写真とめぐり合うことになって、以来、ほど半世紀に近い年月、ぼくは写真に惹かれ魅せられ、街頭や路上を写すテリトリーと見定めて、さまざまに交差するこだわりやとめききとともに、愛憎紙一重のままに歩き振りつけてきた。

そうして迎ってきた写真の道を、自ら回顧するつもりはないが、ふと思いを、過ごし来た時間と空間へとめぐらせたとき、相反した二つの感情に捉われてしまう。つまり、その思いの一方は、自分はこんなにも幾多の場所で、かくも夥しい数の写真を撮ってきたものかという驚きの感想であり、反するもう一方の思いとして、写真写真と言いつつはきたものの、たったこれだけのものしか撮ってこなかったのかという、自分に向ける感情である。

一人のストリート・カメラマンが、圧倒的に流動する外界にレンズを向けて、世界を露わにすることなどむろん至難のわざである。そしてぼくには、半世紀に近い時間の中、カメラを手にした路上で、ほとんど途方に暮れていた記憶しかない。"にもかかわらず撮る"という内心くりにかえすフレーズだけが、ぼくの唯一の支えであり拠り所であった。

たとえ写真が、いかに個の美学や観念の領域から写されたものであれ、本来的あるいは終局的に無名性を帯びて、写真は、人類の歴史、世界の歴史の資料として存在しうる能力を持つ。

ともすれば日々、写すことのもどかしさやたよりなさを感覚しつつも、そうした写真の誘惑は、ぼくをつかまえて離さない。

今回の展覧会のもう一つのパートとして、ぼくが先年数回にわたって撮影し、昨年の一冊の写真集にまとめた「ハワイ」の大型プリントによる展示がある。

ぼくはもうずいぶん前から、ハワイは一度撮っておきたいと考えつけていた。ハワイはぼくにとって、日常の撮影のルーティンワークの側に沿って、ひそやかに流れるもう一本の水脈のような感じとしてあった。日本や日本人とは、決して無縁ではない南の島の明るみと暗がり、モノクローム・フィルムに写しておきたかったのである。

東京で唯一の写真美術館である当館におけるぼくの初の個展が、観に来てくださる人々の目にどのように映るものか。もし一点でも、人々の心にインスピレーションをもたらし、写真という無音の世界からのメッセージが伝わるとするならば幸いである。

それにしてもぼくは、現在でも路上をぼつぽ歩き、相も変わらず、人を写し物を写し、犬を写し花にレンズを向けている。(スタート)カメラでスタートした中学生のころと、何ひとつオレは変わっていないなあと思い、つくづく感心し可笑しくもある。

森山大道

森山大道展 I. レトロスペクティヴ 1965-2005 II. ハワイ

会期: 2008年5月13日(火)ー6月29日(日)

主催:

I. レトロスペクティヴ 1965-2005: 東京都 東京都写真美術館/産経新聞社

II. ハワイ: 財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館/産経新聞社

特別協賛: カルティエ

協賛: EPSON

協力: タカ・イシイギャラリー

後援: サンケイスポーツ/タリファジ/フジサンケイビジネスアイ/izal/SANKEI EXPRESS

## はじめに

森山大道がフリーの写真家として活動を開始した1960年代は、木村伊兵衛、土門拳による戦後リリズム写真運動により、多くのアマチュア写真家を巻き込んで写真文化の豊かな土壌が築かれていた。そしてそれらを批判的に継承した戦後世代にあたる東松照明らVIVOの世代の写真家によって表現の個性化が進み、広告やドキュメンタリーのジャンルで著名写真家が輩出された時代であった。

その中で森山大道は忽然と写真界に登場し、「アレ、ブレ、ボケ」写真をはじめ強烈な個性で革新的写真を次々と発表、これまでの写真の概念に対し「写真とは何か」と挑発的に疑問を突きつけた。そして自らにも同じ問いを課し、スランプを経て独自の写真世界を築き上げていった。それは写真を現実世界の複写、断片として、記憶や欲望といった個人的感覚の中に更に深化させていく、現代写真の先駆けとなるものであった。

写真家として半世紀近い活動を続ける現在も、森山大道の写真は、世代や言葉の違いを超えて多くの人たちに支持されている。本展覧会では多くの人々を魅了してやまない森山大道の作品の魅力を東京都写真美術館コレクションに、東京工芸大学、タカ・イシイギャラリー、個人コレクターの貴重なコレクションを加え、I. レトロスペクティヴ 1965-2005、約200点、II. ハワイ65点で紹介する。また、写真集、写真雑誌、著作によりその写真探求の軌跡に迫るものである。

## 1. 1960年代 森山大道の登場

森山大道は大阪で商業デザイナーを経て、写真家岩宮武二のスタジオ「岩宮フォトス」で修業を積み、1961年岩宮の紹介で東京のVIVOの事務所を籍として上京する。この事務所は戦後世代の個性豊かな写真家、東松照明、細江英公、川田喜久治、奈良原一高、佐藤明、丹野章によって設立されたセルフエージェントであった。VIVOは解散が決まっていたが、これを機に細江英公の助手を3年間務め、1963年フリーのカメラマンとして独立した。翌年、生涯にわたり森山の良き理解者であり、ライヴアルとなる中平卓馬と知り合う。このように写真家として駆け出しの頃から森山大道は才能豊かな写真家、編集者、作家たちとの出会いに恵まれていた。東松照明へ傾倒し、東松の《占領》に着想を得て撮影された《ヨコスカ》(1965年)は、写真雑誌への実質的デビュー作となった。この全く無名の写真家森山大道の《ヨコスカ》をひと目見て『カメラ毎日』への採用を決めたのが、稀代の編集者山岸章二である。森山大道は山岸にその比類なき才能を見出され、1967年、カメラ毎日に寺山修司とともに旅芸人小屋や大衆劇場を巡り撮影した《にっぽん劇場》を掲載。同年このシリーズで写真批評家協会新人賞を受賞する。しかし、下町の土着的なテーマに対する評価をじっくり受け止められず、これを払拭するため森山大道はこれまでに撮りためた写真を混ぜ合わせ、すべての文脈(テーマ)をたって不規則に写真を並べた処女写真集『にっぽん劇場写真帖』(1968年)を発表した。森山大道の写真界へのプロヴォーク(挑発)の始まりでもあった。

## 2. 1968-1972年 プロヴォークの時代

60年代後半から70年代初めにかけて、森山大道は写真雑誌を舞台に既存の写真の概念に対し「写真とは何か」という問題を突きつけながらエネルギーに活動を展開した。愛読書ジャック・ケルアックの『路上』に触発され、車で国道を走りながら擦過する風景に向かって銃弾のようにシャッターを切り、それらの作品は『カメラ毎日』に(国道シリーズ)として発表された。この時期、森山大道が写真界に大きな衝撃を与えたのが、「アレ、ブレ、ボケ」という写真のタブーとされてきたものを逆手に取った表現だった。カメラがブレ、ピントがボケ、水平線が傾き、画像の粒子が荒れ、トーンはハイコントラスト。写真界を席巻したこれらの写真の代名詞として「アレ、ブレ、ボケ」という言葉が生まれた。また森山大道はリアリティの在りかを、既存の印刷物、テレビや映画の画像に見出した。1969年『アサヒカメラ』連載の《アクシデント》シリーズでは、ベトナム戦争関連のテレビ画像や交通安全ポスターという既存の印刷物などを複写し「写真・構成＝森山大道」として発表した。これらは写真のオリジナリティに対し挑戦状を突きつける行為と捉えられ、「アレ、ブレ、ボケ」同様、写真界に物議をかもし結果になった。そして写真は言葉を超えた世界を現すものではないかという思いを深めながら中平卓馬、多木浩二らが中心となり「写真が言葉を挑発する」といったラディカルな問題提起を行った同人誌『プロヴォーク』への参加、そして写真集『写真よさようなら』の出版に突き進んでいく。

## I 写真集

森山大道・寺山修司『にっぽん劇場写真帖』(1968年室町書房)

## II 主な作品掲載逐次刊行物

『現代の眼』1965年2月号(無言劇)  
『カメラ毎日』1965年8月号(ヨコスカ)  
『アサヒカメラ』1966年9-12月(街に戦場あり)  
『カメラ毎日』1967年1月号(にっぽん劇場)

## I 写真集

『まずたしからしきの世界を捨てろ 写真と言語の思想』  
1970年 田畑書店 共著  
『写真よさようなら』1972年 写真評論社  
『映像の現代10 狩人』1972年 中央公論社  
『記録 第1号』1972年-『記録 第5号』1973年 自費出版  
『続続』1972年 芳賀出版

## II 主な作品掲載逐次刊行物

『カメラ毎日』1968年12月号 国道シリーズ(徳の一号線)  
『アサヒカメラ』1969年1-12月号(アクシデント)  
『カメラ毎日』1969年10月号  
(東京現状・国道16号線(オンザロード))  
『アサヒカメラ』1970年1-12月号(何かへの旅)  
『朝日ジャーナル』1971年8月-72年5月(もう一つの国)

## 3. 1970年代 何かへの旅

1970年、『アサヒカメラ』《何かへの旅》をかききりに、70年代森山大道は写真雑誌に次々と旅先でのスナップを発表した。代表作のひとつといえる《犬の町》は青森県三沢市で撮影されたものだ。

とりわけ北海道はこの時期に幾度となく訪れている。森山大道が北海道を選んだ理由として田本研造を初めとする北方の写真家たちの存在が上げられる。森山大道が常に立ち戻るうとした写真の原点は、世界最初の写真と言われるニセフォル・ニエブスの写真であった。明治の北海道開拓使たちの記録写真はニエブスと同様、森山大道に写真の原始に迫る啓示を与えたのだ。プロヴォーク以降、思うように写真を撮れなくなった森山大道は、原点に戻るべく、北海道での長期滞在を決め、1978年夏、札幌を拠点として三か月間滞在し、一人撮影に専念した。しかし、それはまた森山いわく「ヌエをつかむような」毎日であり、その作品には北海道の地を迷い犬のようにあどなく歩きまわる森山大道のセンチメンタルな眼差しが見てとれる。

70年代末に向けて森山大道は「写真との肉離れ」が深刻化していったが、その一方、70年代の重要な活動として、ワークショップ写真学校への参加やイメージショップ・CAMPの設立があげられる。ここで森山は実践に基づく後進の育成に携わり、北島敬三や倉田精二らが輩出された。

## 4. 1980年代 光と影

1981年『写真時代』創刊号の新連載「光と影」で森山大道は長いスランプから抜け出すことができた。再起の舞台は北の旅ではなく、庭先の日向からであった。「光と影」シリーズでは花が、家が、道が燦々とした太陽の光で照らされ、まだ痛み上りのような弱々しさはあるものの、光を素直に感じる真摯な眼差しがそこに感じられる。

スランプの中で「写真とは何か」と問い続けた森山大道は、「写真は光と時間の化石である」ことを、ようやく素直に体現できるようになった。自分をぎりぎりまで追いつめた末に開けた境地は、作為を無くし光を単純、明快に捉えることだった。このシリーズを82年写真集『光と影』として出版、翌年日本写真協会年度賞を受賞した。

森山大道は『アサヒカメラ』《犬の記憶》1982年で自伝的文章と写真を連載。これに写真家としての半生をつづったエッセイを加えて『犬の記憶』(1984年朝日新聞社)として発行された。

## I 写真集

『(もう一つの国) ニューヨーク』1974年 自費出版  
『現代カメラ新書26 遠野物語』1976年 朝日ソノラマ  
『ソノラマ写真選書6 続にっぽん劇場写真帖』1978年 朝日ソノラマ

## II 主な作品掲載逐次刊行物

『カメラ毎日』1973年1月号(地平線 北海道)  
『アサヒカメラ』1973年1-12月(地上)  
『アサヒカメラ』1975年4月号増刊(遠野物語)  
『カメラ毎日』1976年8月号(東京朝目の世界)

## I 写真集

『光と影』1982年 冬樹社  
『神治への旅』1987年 葦荷舎  
『MORIYAMA Daido 1970-1979』1989年 葦荷舎

## II 主な作品掲載逐次刊行物

『写真時代』1981年9月創刊号(光と影)  
『毎日グラフィ』1981年11-12月(森山大道 アングル'81)  
『アサヒカメラ』1982年4月-83年6月号(犬の記憶)  
『毎日グラフィ』1982年1-5月(森山大道 アングル'82)  
『カメラ毎日』1984年1-12月号(光の伝記)  
『写真時代』1984年8月-85年7月(神治への旅)

## III 主な写真集・展覧会図録(1990年代-2005年)

『サン・ルウへの手紙』1990年 河出書房新社  
『Daido-hysteric no.4 1993』1993年 ヒステリックグラマー  
『COLOR』1993年 葦荷舎  
『Daido-hysteric no.6 1994』1994年 ヒステリックグラマー  
『Imitations』1995年 タカ・イシイギャラリー  
『犬の時間』1995年 作品社  
『OSAKA Daido-hysteric no.8 1997』1997年 ヒステリックグラマー  
『狩人』1997年 タカ・イシイギャラリー  
『日本の写真家37 森山大道』1997年 岩波書店  
『Vision of Japan MORIYAMA Daido』1999年 光琳社出版  
『水の夢』1999年 葦荷舎  
『4区』1999年 ワイズ出版  
『daido MORIYAMA: stray dog』1999年 San Francisco Museum of Modern Art  
『Transit』2002年 彩都メディアラボ  
『71-NY』2002年 PPP Editions  
『新宿』2002年 月曜社  
『PLATFORM』2002年 大和ラチエーター他  
『Complete Works Vol.1-4』2003-04年 大和ラチエーター  
『DAIDO MORIYAMA』2003年 La Fondation Cartier pour l'art contemporain  
『光の狩人 森山大道1965-2003』展 島根県立美術館他  
『NOVEMBRE』2004年 月曜社  
『ROUTE 16』2004年 インセンシア  
『森山・新宿・荒木』2005年 平凡社  
『宅野』2005年 葦荷舎  
『ブエノスアイレス』2005年 講談社

岡部友子(東京都写真美術館 学芸員)